

# 「まちは劇場」および文化芸術フェスティバルの発展と 持続可能な取組に向けての調査研究について

日本大学 国際関係学部 金崎ゼミ

指導教員：金崎賢希

参加学生：田岡英、島野元気、中川京美、松山純菜、佐々木大翔、山本慶治、  
牧野心勇、石原匠悟、蟹和宏斗、菊地康太、森本ゆう、王子旋、吉田弘基

## 1 要約

本研究は、静岡市の「まちは劇場」政策の一環であるストリートシアターフェス「ストレンジシード」に大学生の視点で参加し、表現に直接関わる「参加側」と通りすがりに関わる「観る側」の二つの立場から、文化イベントがまちや人の関係性に与える影響を立体的に考察したものである。

ストレンジシードは街と人をゆるやかにつなぐ「楽しさ」を起点とした場であり、その価値は完成された作品そのものよりも人が関わり続ける過程にある。したがって、参加の入口設計を改善して観客の反応を自然に拾い、参加体験を可視化して誘導できれば、一過性のイベントを超えて街に根づく文化として広がっていく可能性が高いと考えられる。

## 2 研究の目的

これまでも、文化芸術に関するフェスティバルは多くの自治体で行われてきた。しかし、最初は物珍しさにひかれて多くの人が見学・来場しても、市民が文化芸術の価値や魅力を理解し、かつ自身の生活に「なくてはならないもの」として支持・支援・参加しなければ、継続的な発展は見込めない。そこで、本調査研究では、とくに「演劇・ストリートシアターの市民への普及啓発・魅力創出に向けた取組、とくに若者をターゲットに共感・共創を生み出すための戦略の構築」を目的とした。

## 3 研究の内容

ストリートシアターグローバル人材育成プロジェクトSTRANGE Lab.の「ストリートシアターってなんだ？」に参加している方々に話を伺うなど、ストリートシアターに対する理解を深めながら、静岡市が行っている演劇やストリートシアターがどのように市民の間で普及・共感されてきたのか明らかにすべく、市民を含めた関係者への参与観察やデプス・インタビュー調査を行った。

また、そうした調査研究から、今後、市民への普及啓発・魅力創出に向けてどのような取り組みが可能か、演劇やストリートシアターがまさしく「文化」としてどのようなように市民の間で根付き、展開していくのかを検討し、最終的には、なかでも若年層をターゲットに共感・共創を生み出すための戦略を検討・提案した。

## 4 研究の成果

### (1) 当初の計画

当初の計画としては、①ストリートシアターグローバル人材育成プロジェクトSTRANGE Lab.の「ストリートシアターってなんだ？」に参加している方々に話を伺うなど、ストリートシアターに対する理解を深めながら、②これまで静岡市が行ってきた演劇やストリートシアターがどのように市民の間で普及・共感されてきたのか明らかにすべく、市民を含めた関係者への参与観察やデプス・インタビュー調査を行い、③そして、そうした調査研究から、今後、市民への普及啓発・魅力創出に向けてどのような取り組みが可能か、

演劇やストリートシアターがまさしく「文化」としてどのようなように市民の間で根付き、展開していくのかを検討し、最終的には、なかでも若年層をターゲットに共感・共創を生み出すための戦略を検討・提案することを挙げた。

### (2) 実際の内容

令和7年7月に「ストリートシアターってなんだ？」に参加し、ストリートシアターに対する理解を深めた。そして、同年12月に開催された静岡市のストリートシアター「ストレンジシード静岡『BRAND NEW STREET-呉服町、石畳だけは知っている-』」に参加し、他の参加者と創作活動とパフォーマンスを一緒に行いながら、創作活動の過程で市民の人々がどのように思い入れを深めていくのか、観察・調査し、ストリートシアターが「文化」としてどのようなように市民の間で根付き、展開していくのかを検討・提案した。

### (3) 実績・成果と課題

本研究では、大学生の視点から文化的イベントがまちや人の関係性に与える影響を考察した。静岡市が進める「まちは劇場」という街全体を表現と出会いの場とする施策の実践例として、ストリートシアター中心のフェスティバル「ストレンジシード」に実際に参加した経験を基に検討し、とくに「参加側」（表現の内側に入る者）と「観る側」（外から見守る者）の二つの立場の違いに注目して、文化イベントがまちづくりで果たす役割を立体的に把握することとした。

静岡市の「まちは劇場」は、街を一つの劇場とみなし、365日わくわくが溢れる人が主役のまちづくりを目指しており、場所・人・催しが重なり合って日常の中に文化を立ち上げることを目標としている。この方針のもと大道芸や商店街でのコスプレなど、街なかでの表現活動が多く行われ、今回のストレンジシードもその一環である。

ストレンジシードは、ストリートシアターの考えを基盤としたフェスティバルで、演劇を観に来ることを前提としない自由な観覧様式が特徴である。チケット不要で途中入退場が許され、通りすがりの人も観客となることで日常空間に文化と出会う入口を生んでいる。筆者が参加した回はアーティストのさんびん氏主導のワークショップ型創作「BRAND NEW STREET」で、呉服町の記憶や歴史、個人の思い出を素材に街そのものを物語化する試みが行われた。

以下、参加側と観客側を分け、それぞれの効果を整理・比較することによりイベントの意義と課題を明らかにする。

参加側の視点では、演劇未経験の大学生でも受け入れられる敷居の低さとアットホームな雰囲気があり、さんびんさんのワークショップが安心感と関係性を生み出していた。具体的には名前を覚えるワークや交差して歩くワークなどで短時間に互いの距離感が縮まり、失敗しても大丈夫という空気が醸成された。また創作では、劇団員や高校生、親子、大学生、教員といった多様な参加者の呉服町にまつわる記憶が素材となり、多様性が組み合わせることで偏らない深みある物語が生まれた。

観客側の視点では、多くが「演劇を観に来た人」ではなく通りすがりの断片的関わりを持つ人々であった点が特徴的であり、途中で立ち去ったり写真だけ撮るなど短時間の関与が多かった。しかしこの「途中から関わり途中で離れる」在り方こそがストリートシアターならではの観客層拡大の要因であり、ストレンジシードの大きな特徴であった。

しかし、一方で、観客の意見が十分に拾えていないという課題も浮き彫りになった。具体的な課題としては二点ある。第一に、観客の声の記録が不十分で、アンケートに協力するのは主に演劇関心者やリピーターに偏り、通りすがりの初見観客の反応は記録に残りにくい構造である。第二に、参加のハードルの課題で、実際には敷居が低い場であるにもかかわらず外から見ると「劇経験が必要」「表現に自信のある人向け」に見えやすく、内側に入るイメージが可視化されていないため心理的障壁が残っている。

#### (4) 今後の改善点や対策

今年度ゼミの活動は主に12月のストリートシアターのワークショップ参加にとどまった。そのため、一般の高校生や大学生に、まちは劇場やストリートシアターに関するアンケート調査などをすることができなかった。そのため、12月のワークショップにそうした学生の参加を促すことができなかった。今後は、今年度の体験・経験を活かす形で、他の大学生や高校生にも参加を呼び掛けていきたい。

### 5 課題提出者・地域への提言

以上の分析を踏まえ、筆者はストレンジシードや同種の野外フェスをより良くするための提案を四つ挙げる。

①投げ銭を「一声」として活用し、投げ銭時に一言コメントを残す仕組みや感情を選択式で答えられる機能を付けることで、自然な形で観客の反応を記録する。

②アンケートではなく「痕跡」を残す参加方法の導入で、シールを貼る、色で選ぶなど考えずに参加できる簡便な手段を設けることで、観客が「関わった」実感を得られるようにする。

③観客も一時的な「出演者」になる設計を増やすこと、すなわち観るだけでなくその場にいたこと自体が作品の一部だと感じられる演出を取り入れることでまちと人の結びつきを強化する。

④参加しやすい入口づくりで、いきなり作品に関わらなくてもよいインターンや短期体験、ワークショップ見学や参加型プログラムなどを用意し、「演劇をする場」ではなく「人と街に関わる体験」として提示することで心理的ハードルを下げる。

最後に、本研究を通じて、ストレンジシードを単なる演劇祭や街の説明イベントと捉えず、楽しさを通して人と人、人と街をゆるやかにつなぐ場であることがわかった。参加者にとっては初対面の人と関係を築き自分の記憶や感情を街と重ねる体験の場であり、観客にとっては日常の中で偶然文化に出会う入口であるため、重要なのは「分かってもらふこと」よりも「また関わりたいと思ってもらうこと」である。

今回の参加を通じて、ストレンジシードの本質は完成された作品ではなく、人が関わり続ける過程にあり、参加のハードルを下げ観客の声を拾い、楽しさを次につなげる仕組みを整えることで、ストレンジシードは一過性のイベントではなく街に根づく文化としてより多くの人に開かれていく可能性があるということを感じ取ることができた。

### 6 課題提出者・地域からの評価

まずは、今回、静岡市の地域課題に向き合い、調査・研究に取り組んでくださり、誠にありがとうございます。

本市が抱える「演劇の価値や魅力を市民に十分に届けきれていない」という課題に対し、本報告は、「まちは劇場」およびストリートシアター型のフェスティバルについて、実際の参加体験を基に、参加者と観客の双方の立場から考察がなされており、事業の特性や効果を的確に整理した内容は大変参考になりました。

とくに、途中参加・途中離脱を含む多様な関わり方をストリートシアターの特徴として前向きに捉えつつ、観客の声が記録に残りにくい構造や、参加に対する心理的なハードルといった課題を具体的に示している点は、運営側では気づきにくい視点であり、今後の取組を検討するうえで重要な示唆といえます。

また、観客の反応を自然に記録する仕組みや、関わった実感を残す参加方法、「演劇をする場」ではなく「人とまちに関わる体験」として提示する提案など、現場での実践を意識した具体的な視点が示されており、文化芸術イベントを一過性のものに終わらせず、市民一人ひとりの「自分事」としてまちに根づく取組へとつなげていく可能性を感じさせる内容でした。なお、いただいたご提案につきましては、ストレンジシード静岡事務局とも

共有し、市民のみなさんとともにつくるフェスティバルとして、今後の発展に活かしていきたいと考えています。

本報告を通じて示された視点や提案は、今後の「まちは劇場」の取組を考えるうえで、多くの気づきを与えるものでした。ぜひ今後も、皆さんそれぞれの関わり方で、「まちは劇場」に力を貸していただければと思います。ありがとうございました。

(静岡市観光交流文化局 文化政策課まちは劇場推進係 近藤有加様)



写真は、  
左上：ワークショップの様子  
右上：ワークショップ期間中、参加者の寄せ書き  
中左：ワークショップの様子  
中右：イベント本番の様子  
左下：イベント終了後、市民の方々との対話